

IDに基づいた授業設計に関するFD研修の添削と持続的運用

Report Correction for Sustainable Operation in Instructional Design Seminar for Faculty

根本淳子, 岩崎千晶, 高橋暁子, 鈴木克明

Junko NEMOTO, Chiaki IWASAKI, Akiko TAKAHASHI, Katsuaki SUZUKI

愛媛大学, 関西大学, 徳島大学, 熊本大学

Ehime University, Kansai University, Tokushima University, Kumamoto University

＜あらまし＞日本教育工学会が実施するFDセミナーでは参加者自身の授業改善案について考えるため、最終レポートとして提出された授業改善案の添削活動では、参加者の授業改善に繋がるフィードバックコメントを返すことを重視している。今回は、2014年より変更した添削の仕組みとその結果についてまとめ、セミナーの普及を見据えた長期的な運用について検討する。

＜キーワード＞ ワークショップ, 添削活動, レポート提出, 高等教育, FD

1. はじめに

日本教育工学会で実施しているFDセミナーは、大学授業のデザインについて学ぶ反転学習を活用した実践型の半日ワークショップである。本セミナーでは、参加者自身の担当授業を題材に、具体的な改善案について考える点が特徴である

(根本ら 2013, 松田ら 2014)。改善に必要なインストラクショナルデザインに関する基本的な知識は、LMSを使って事前学習で習得し、当日の半日セミナーでは、参加者間で意見を交換し、具体的な改善案について検討していく。セミナーで取り上げられた授業改善結果は、最終レポートとしてまとめ・提出され、講師による添削を受けたのち、認定証が渡される。そのため、セミナーを運営するにあたって添削活動は必須である。

本発表では、本セミナーの最終レポート添削活動を取り上げ、添削手続きとその結果を考察し、添削活動が効率的に運用される仕組みについて検討する。

2. レポート内容と添削の位置づけ

最終レポートは、本セミナーで学んだスキルやその適用度合いを問うだけではなく、受講者の概念変化を受けて授業計画が変化する様子をとらえることを重視している(松田・根本印刷中)。最終レポートでは、指定された12項目に沿って、科目の基本情報に加え、セミナーでの活動や得られた知識を参考しながら参加者が考える改善や継続したい内容とその理由を書くことが求められる。実施者側は、理由を問う項目の全項目にお

いて事実や意見として書かれた解答を元に、IDの観点からひとつひとつの理由の妥当性を検討する必要があると考えた。検討を通じて、レポートに記述された改善内容の現実性や有用性を見極め、今後の提案を含むコメントを返却することを大事にしている。

このような活動が可能であったのは、添削担当者が本セミナーの設計に携わった者に固定されていたためである。レポートの添削には、1件につき1時間程度の時間が必要となる。添削の効率化を図ることは、将来的にセミナーの回数の増加や規模を拡大していくことや、学会活動の一部としてセミナーが継続されていくために重要な課題であった。そこで、2011年から実施している添削の仕組みを変え、複数人で添削ができる仕組みづくりに2014年度から取り組むことにした。

3. 添削手続き

レポートが提出されると、添削担当者が内容を確認し、合格判定と併せてレポートに対する良い点とさらなる改善に向けたコメントをつけて返却する。レポート提出に不安を持つ参加者もいると想定し、最終締め切りの2週間ほど前に添削希望者向けの締め切りが設定されている。これによってフィードバックを早めに受け、再提出の機会を持つことが可能となっている。

レポート添削の新たな仕組みでは、一次と二次添削の二段階で添削をすることとした。2014年度の実施方法を踏襲し、2年目にあたる2015年度は一次担当者6名と二次評価者兼添削リーダー

ー2名が担当した。本セミナーのファシリテーターであることを添削担当者の前提条件とした。

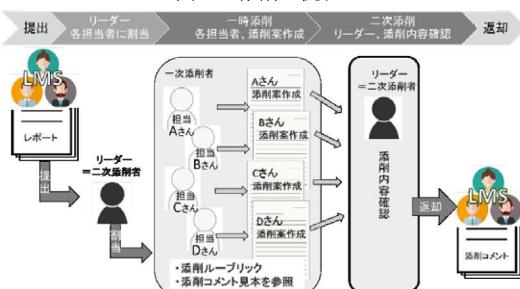
添削の流れは図1に示す通りである。リーダーが提出状況を確認し、担当者を割り当て、一次添削担当者が添削する。添削結果とフィードバックのためのコメントシートは、二次添削者（リーダー）が最終チェックし、参加者へ返却する。その際、添削活動は、記述ポイントを示したガイド種と、返却用フィードバックコメントの見本二種、そして添削の基準となるチェックリストを含むループリックを共有して行った。

4. レポート内容と添削活動分析結果

セミナー参加者35名のうち、添削希望者（一次締切提出者）は12人、最終レポート提出者（二次締切提出者）は15人で、合計24名（69%）が提出した。添削希望者のうち、一次・二次締め切りの両段階でレポート提出したのは3名で、うち、記入不足を一次で確認して最終版を二次で提出したのが2名、一次で合格した内容を踏まえ、二次で再度改善したシラバスを提出したのが1名だった。レポート提出率は、2013年度が20(63%)人、2014年度が24(83%)人であり、昨年と人数は同じであるが提出率は低かった。レポート内容を見ると、自然科学系が7件、人文科学系が17件で、うち6件は初年次・キャリア教育に関する内容であった。結果は全員合格で、Sが15件、Aが8件、Bが1件であった。

添削プロセスを確認すると、一次添削から二次添削の段階で評価が変更になったのは、2件だった（一致度92%）。1件はS判定からAへ、もう1件はB判定からA判定への変更であった。前者は、目標と評価の関係性に対する評価判定に修正が入り、コメント内容も追加された。後者は、点数もコメント内容もほぼA判定と大差なかつたため、A判定とした。

図1 添削の流れ



二次添削担当者が一次添削の結果に対して加えた修正内容は、1) 今後の改善に関するコメントの順番の変更（優先順位の変更）、2) 今後の改善に関するコメントの補足、3) 今後の改善に関するコメントの新規追加、4) 誤字脱字などの微修正であった。改善に関するコメント修正は、目標と評価と方法の整合性に関する内容が大半を占めた。これらは、添削用ループリックで示されているIDに関する視点に関係しており、授業の構成を明確にして整理するために必要な検討課題として、セミナーで重要視している点の一つである。また、これまでの添削コメントの中で、最も多い指摘内容でもあった（根本ら2013、松田ら2014）。目標と評価と方法の整合性に関するコメントに関しては、添削担当者にとっても、参加者にとっても難易度が高い点と考えられ、運用での対応方法を今後も検討する必要が残った。

5. まとめ

添削用ループリックやガイド等を参照して、一次添削担当者は添削活動を行うことができた。コメントの優先度や表現等に関しては、二段階添削によりフォローが可能となったが、二次添削者が指摘した修正内容は特定の箇所に集中しており、改善の余地がある。また、初心者・経験者両方の添削担当者から添削活動に時間がかかるという意見が挙げられた。あらかじめ、コメント上でよく用いられる表現や高頻度の指摘項目に対応したひな型を用意し、質を保証しながらも、負荷を軽減することが考えられる。

また、一次と二次添削者間のやり取りを可視化するために添削用のシステムを導入することも考えられる。運用の安定化と効率化を目指し、これまでと同じサービスを提供できるよう、さらなる改善に取り組む。

参考文献

- 松田岳士・根本淳子・鈴木克明(2014) FDセミナーは大学の授業改善にどのように活かされたか、日本教育工学会第30回全国大会発表論文集 265-266.
- 松田岳士・根本淳子(印刷中)「最終レポート添削ループリック(第7章)」松田岳士・根本淳子・鈴木克明(編著)、日本教育工学会(監修)大学授業改善とインストラクションナルデザイン(教育工学選書2期14巻)、ミネルヴァ書房、東京。
- 根本淳子・高橋暁子・鈴木克明(2013)「日本教育工学会FDワークショップの改善」日本教育工学会研究報告集13-1、325-328